

大都研究の現状と課題

一 はじめに

周知のように、現在の中華人民共和国の首都である北京の祖型こそ、元朝の世祖クビライ（一二一五〜九四）の時代に建設された、大都である。この大都、ひいては北京研究はこれまでどのような進められてきたのか。首都であることから、一程度の興味関心が注がれてはきたものの、新宮学による、「日本の北京研究をみると、すでに多くの蓄積をもつ長安・洛陽研究や開封研究に比べると、決して活発だとは言えない状況にある」との指摘が北京のみならず大都においても通用するように（一）、活発な議論が取り交わされているとは必ずしも言い難い。しかしながら、最近順に進展著しい中国の他の時代の都市研究や、イスラーム・日本等の他地域の都市研究と比較してみても、元の大都にもまだ研究すべき余地は存在すると考える。

本稿では、これまでの大都研究を振り返り、問題点を析出することで、今後の大都研究の方向性を模索していきたい。さしあたり研究の回顧にあたって、一つは都城の設計と建物の配置について、一つは大都の歴史的位位置づけに関してという二つの柱軸を設定して考

えていくこととしたい。

二 大都の都市空間に関する研究

1 中華人民共和国成立以前の研究を中心に

大都の都市空間を論じる過程で必ずといっていいほど議論の俎上に上げられてきたのは、平面プランの問題である。この点について論点は大きく二つに絞ることができよう。

Ⅰ 宮城が極端に南偏していること。

Ⅱ 城門の数が『周礼』プランとは齟齬する十一門であること。ここでは特に、大都研究において、唯一活発な議論が取り交わされた問題といえるⅠについて研究史を整理していきたい。

Ⅰの問題につき、まず先鞭をつけたのが、藤田元春「都城考」〔『尺度綜考』刀江書院、一九二九年〕と那波利貞「支那首都計画史」〔『尺度綜考』刀江書院、一九二九年〕と桑原博士還暦記念東洋史論叢「弘文堂、一九三一年」である。かれらはあくまで中国の都城全般の特徴を語る上で大都について注目したのであるが、のちに議論となる論点をすでに提示している。つまり、大都の宮城が南偏していること、そしてそれが中国古代の国都造営にあたって理想となる、『周

渡辺健哉

「礼」の王城モデルに基づくことの二点を指摘した。「周礼」モデルとは、中心に宮城を配し、その南に朝廷、北に市場、皇帝が南面した際の東に宗廟、西に社稷、そして宮城の左右に民家を建築させるというものである。特に那波論文がきっかけとなり、以後の研究は、大都が「周礼」モデルと適合するものであったか否かという点を軸にして検討が進められていく。

この問題については、村田治郎・駒井和愛・山根徳太郎の諸論考によって、さらなる議論の深化が試みられた。興味深いことに、彼らはみな東洋史学を専門とする研究者ではない。村田は東洋建築学、駒井は東洋考古学、山根は日本考古学の研究者であった。あえて彼らに共通点を見出せば、北京乃至は中国滞在の経験の有ることである。村田は大正十三年（一九二四）四月に南滿洲鉄道株式会社に入社、そののち当時は大連にあった南滿洲工業専門学校教授に就任し、盧溝橋事件が勃発する直前の昭和十二年（一九三七）四月に、講師として京都帝国大学工学部に着任するまでの十三年間滿洲に勤務していた（二）。駒井は昭和三年より約一年間、山根も昭和十六年より約一年間、それぞれ北京に留学している（三）。この中国での生活経験が、そこに幾何かの時代状況が刻印されているにせよ、都市のプランに思いをいたすきっかけになったと考えるのは想像に難くない。こうした三人による研究は、大都が建築学や考古学の視点からみても魅力的な研究対象であったことを示しつつも、またその反面、大都研究の出發に際しては、歴史的見地からの検討がなされなかった事実をも物語っている。かれらが一樣に問題としたのは宮城が南偏した理由である。

まず村田治郎「元・大都における平面図形の問題」（『滿洲学

報』三、一九三四年。のち改題・増補して『中国の帝都』綜芸社一九八一年、所収）は、遊牧民族が使う移動式簡易テント・オルドの設置形態との類似から、「大都の宮城の一郭はモンゴル人のオルドウの制を応用し、南端部の中央地域を占めた形になるように、都城平面図を構成した」という結論を導き、「周礼」モデルを否定して宮城南偏の理由をモンゴル人の慣習に帰結させた。村田の着想はキリスト教宣教師の実見した、オルドの記録を論拠としたため、そこにいささかの論理的飛躍が生じている感は否めない。のちに紹介する侯仁之にいたっては、村田説を「牽強附会」と評する。ただし、瓊華島付近に宮城を建設した、ということに着目した点は評価すべきで、後述するように杉山正明の立論にも影響を与えた。

村田説に対し、明確な反論を提示したのが駒井和愛「元の上都並びに大都の平面について」（『東亜論叢』三、一九四〇年。のち『中国都城・渤海研究』雄山閣出版、一九七七年、所収）である。駒井は、瓊華島を宮城内に取り入れることによって、その都城の平面は必然的に地図で示されるようなものになると述べ、さらにその下敷きになったものとして「周礼」考工記匠人宮国の条を挙げ、「劉秉忠はさきによつて唐の長安城にみるがごとく都城を築いたのであるが、ついで大都を営むに當つては主として周の王城制になつたものと想われるのである」と結ぶ。村田・駒井は、南偏の理由を探し求めるところから出發し、前提としてそこに存在したであろう何らかのノルムを見出そうとした。

これに対し、山根徳太郎「元・大都」の平面配置」（『人文研究』一一二、一九四九年）は、「周礼」が都城の建設にあたり、強い拘束力を持っていたのかという疑問から出發し、大都の平面配置を決定

したのは、地理的条件だったとする。すなわち、北京における豊富な湖沼地帯と地下水脈の発達が「元の皇帝の心を離れがたくつなぎとめてしまった」と述べる。都城の宮置がノルムによって決定されるのではなく、自然条件によって決定されるという見解は、山根が日本考古学の研究者であつたためか、または都城プランの選定に際し絶対視された『周礼』を否定する大胆な発想であつたためか、とにかくこれまでの大都研究においてはほぼ無視されてきたといつても過言ではない。しかしながら自然条件を大都選定の理由にする山根説は、引用されることはないが、のちに侯仁之らの中国人研究者によって立証されていくことになる。

一方、一九四九年以前の中華民国期に目を転ずれば、復元研究のほうに力点が置かれていた。先駆的な業績としては、奉寛『燕京故城考』（『燕京学報』五、一九二九年）が挙げられる。これは遼・金・元・明代に至る北京の建物の配置を復元した研究である。数多くの史料を利用して場所を確定する本格的な研究はここから始まつたといえる。中でも特に重要な役割を果たすことになるのが中国营造学社である。

中国营造学社は、朱啓鈴を代表に中国建築史を専門とする学会として一九二九年に設立された。中国营造学社の諸氏は建築学的視点からの復元研究と、文献史料から可能な限り場所を確定していくという手法を併用し、都市景観全体の復元を試みた。朱啓鈴・闕鐸『元大都宮苑図考』（『中国营造学社集刊』一一、一九三〇年）は宮殿の配置や名称について（4）、王璧文『元大都城坊考』（同六一三、一九三六年）は坊の位置について、同『元大都寺觀廟宇建置沿革表』（同六一四、一九三七年）は仏寺や道觀に関する位置や沿革に

ついて、それぞれ明らかにした。同時期に発表された朱俔『元大都宮殿図考』（商務印書館、一九三六年）も同じ系譜に位置づけることができる。これらの研究によって、宮殿の位置や寺觀の場所が詳細に復元され、現在の大都に関わる研究においても必読文献となっている。ただしこれらの研究は、中国营造学社という學術団体の性格上、歴史学や歴史地理学の視点ではなく、中国建築史からのアプローチといえるものであつたことは注意しておきたい。

2 大都の発掘報告公刊以後の研究を中心に

一九三〇年代の復元研究を経ると、大都研究は一時の停滞期を迎える。特に一九四九年の中華人民共和国の成立以降、日本人の研究がほとんど行われなくなるのは、現地北京への往来が以前よりも自由にできなくなった点を一要因として挙げることができるであろう。中国人研究者もかつての中国营造学社が取り組んだような情熱を注ぐことをせず、やはり同様に停滞を迎える。従つて大きな転機となるのは、一九六〇年代に行われた北京の改造工事に伴う発掘成果報告の公表を待たねばならない。

まず、戦前からの復元研究の系譜を継ぐものとして、王璞子（王璧文の字）と趙正之の論考が挙げられる（5）。王璞子『元大都城平面規則述略』（『故宫博物院院刊』一九六〇—三）は中国营造学社による一連の論考を踏まえた復元研究の域を脱し得ないが、趙正之遺著『元大都平面規則復元研究』（『科技史文集』二、一九七九年）にはこれ以前の研究を踏まえた上での、注目すべき見解が盛り込まれている（6）。以下に簡単に内容を紹介しよう。従来は明清北京城の中軸線の西側に元代の中軸線があるといわれていたが、それが一致すると見通した。これはのちの発掘報告とも合致する。また、これ

まで論じられてこなかった尚書省、礼部、兵部、刑部の位置を確定した。そして、大都は正しい長方形ではなく、東側城壁の外には湖沼地帯があつて、それを避けたため、左右対称にはなっていないことを述べた。つまり、地形的制約によつて大都城の位置が決められたとする見解を述べたのである。公刊された年次から、発掘報告との関連性や、徐華芳の手がどこまで加わっているか不明なところなしとはいえないが、今日改めて検討すべき点も数多い。

ところで、一九六〇年代に実施された北京改造工事の結果、大都に関する発掘報告が公表された。中でも一九六八年、立体交差を作るため西直門を撤去した際に、元代の和義門の遺跡が発見されたことは大都研究において一大転機であつた。この発見を中心とした、大都の発掘報告としてまとめられた成果が、中国科学院考古研究所・北京市文物管理处元大都考古隊（ただし直接執筆に携わったのは徐華芳）『元大都的調査と発掘』（『考古』一九七二・一）のち徐蘋（苹）芳『中国歴史考古学論叢』允晨文化公司、一九九五年（所収）である。この論考によつて考古学的成果もまとめておこう。

まず実測の結果、周囲は二八六〇メートルで、中軸線が明清北京城と一致することが確認された。この中軸線は南城壁から麗正門・大明殿・延春閣、そして宮城北門の厚載紅門を貫き、大天寿万寧寺の中心閣までを結ぶ線で、これとは別にその西側に大都城の楼・鐘楼を結ぶ線の延長線上にも大街が存在した。つまり大都城の中心を境に南北を貫く線に若干のズレが存在するのである。また高梁河・積水潭・通惠河を通る河運の水路と、金水河・太液池を通る宮城の用水路との二つの給水路が発見された一方で、大都城東壁の中部と西壁の北部より排水路が発見された。排水路の発見は大都城

内を水が循環していたことを示すもので、大都の位置選定の理由に関わる重要な発見であつた。

この発掘報告と同時に、一の問題につき決定的ともいえる論考を発表するのが侯仁之である。近代中国を代表する歴史家の一人である顧頡剛が主宰した禹貢学会からは、彼の薫陶を受けた歴史地理学者が巣立っていく。すなわち、北京大学の侯仁之、復旦大学の譚其驤、陝西師範大学の史念海である（7）。各人はそれぞれの赴任した地区をフィールドとして、歴史地理学研究を精力的に進めていく。早くから北京の水源問題が大都の場所を選定したと述べていた侯仁之が、この考えを発展させ、さらに発掘報告も踏まえて大都の平面プランについて全面的に論じたものが「北京旧城平面设计の改造」（『文物』一九七三・五）のち『歴史地理学理論与实践』上海人民出版社、一九七九年、所収）である。侯仁之は、大都城の位置決定にあたっては、金の離宮の大寧宮を継承するという歴史的要因と、当初利用されていた蓮河池水系を放棄し、より水量の豊富な高梁河水系を宮城に取り込み、都市の水源を確保したという地理的要因により決定されたと述べる。そして皇城と大城壁が作られてから、城門・坊巷・道路が「周礼」考工記匠人营国条に基づいて平面プランが組み立てられたとする。侯仁之の論考で特筆すべきは、大都城の平面プランについて、『周礼』考工記匠人营国条に基づいた古代の理想プランを、地理的条件と結びつけた見解を打ち出した点にある。

大都の平面図については美術史家の興味も引いたようである。Seinhardt, Nancy Shatzman "The Plan of Kubilai Khan's Imperial City" *Artibus Asiae* 44: 2-3(1983) は、それまでの研究成果を丹念に踏

まへ、大都はモンゴルの要素のみに止まらず、伝統中国の都市プランを反映し、その都市計画の淵源が宋の開封・金の中都に求められるとする。一方で福田美穂「元大都の皇城に見る『モンゴル』的要素の発現」(『仏教藝術』二七・二二〇四年)はこれまでの研究を踏まえて多くの論点を提示する。特に、広範な都城ではなく、大都の皇城がオルドの配置法によって影響を与えられたとする指摘は前述の村田の研究とも併せて興味深い。そして結論として、大都皇城が漢文化の物質的側面を受け入れつつも、自分たちの制度や習慣にもとづいて造り出された空間であったとする。この両者の違いは、大都がモンゴルのなものによって形成されたのか、漢民族的なものによって形成されたのかを検討する点にあるだろう。

最後に現時点での最新の復元研究として、楊寛『中国古代都城制度史研究』(上海古籍出版社、一九九三年)を挙げておく。本書は中国の都市構造に関して著した通史で、「下編 六 元大都和明清北京布局結構的變化」が元の大都から明清北京城について通観している。後述する問題点がやはりまだ存在するとはいえ、『析津志輯佚』等の現在見ることが可能な史料による復元研究はほぼ完成されたと言つてもよい。

以上概観してきたように、日本では平面プランの起源を検討することに注目が集められてきた一方で、中国では主に復元研究が中心となった。紹介してきた論考によって、大都のある一時期の平面図が描けるようになったのは大きな成果といえる。しかしながら、これらの研究は、いわばレイアウトに拘泥しているのであって、大都建設の要因やその歴史的意義についての論及はほとんどなされてこなかった。その理由は、ここまで紹介した研究は歴史地理学・考古

学・建築史学からのアプローチであり、元朝史を専門とする研究者が大都についての論考を発表してこなかったことに起因する。そこで節を改めて、次に歴史学の立場から大都をどのように位置づけてきたのかについて、三人の論考を取り上げていきたい。

三 大都の歴史的位置づけに関する研究

これまで挙げてきた研究者の中に、元朝史を専門として研究した人はいない。ほぼ唯一の例外が、北京を地政学的に考察した、田村実造「歴史上からみた北京の国都性」(『史林』二八・三、一九四三年)のち改題・補訂して『中国征服王朝の研究 中』(東洋史研究会、一九七一年、所収)である。ここでは金から清までの北京地区を概観し、北方民族と漢民族との相互関係を充足させる位置にあった北京には、北アジア的なものと中国的なものとの複合した姿が投影されていたとする。ただしこれも北京を通観したもののであるため、大都の専論は、一九六六年に発表された愛宕松男の論説まで待たねばならない。以下では、三人の元朝史Ⅱモンゴル時代史研究者の大都に関する論考の内容を紹介していくこととしよう。

1 愛宕松男「元の大都」(『歴史教育』一四・一二、一九六六年)のち『愛宕松男東洋史学論集 四』三一書房、一九八八年、所収)

原載誌『歴史教育』当該号が中国の歴史的都市の特集であったため、編集部からの依頼によって執筆されたものと推察される。おそらくは枚数制限の関係からであろう、コンパクトなものとなっているが、随所に鋭い知見を披瀝している点は見逃せない(8)。

愛宕論文では、カーン継承をめぐる紛争によって、フビライの下

に東方モンゴル政権が樹立したとする、政治史の推移の中に大都建設を位置づけた点、及び、ラマ教の影響下で大都が建設され、伝統を無視した建設とみなしている点が注目される。後者は明確に述べてはいないものの、『周礼』プランに対しての否定的見解の表明であつたと付度される。また、大都城内外の繁栄、大都・上都の二都制度の二点につきいち早く注目していた点は興味深い。そして結論として、大都の宮建を軀機とみなし、大都に都を定めたことにより、漢地が優位になったことを説く。

さらに、愛宕論文ではじめてIIの城門の問題について新見解が提示された。城門の数が十一門という半端な数であつたのは、那咤太子の加護を求めたからであつたというのである。発表当初、この説が他者により検討された形跡はない。しかし、大都が那咤太子を象つたものであるという説は、むしろ中国で受容された。次に紹介する陳高華『元大都』では、愛宕とは異なる史料を用いて、同じ結論に到達している。愛宕の議論を深化させ、特に明代を検討対象とし、この北京城建設の伝説が民間伝承として受容されていく経緯を詳述したのが、陳學霖『劉伯温与哪咤城——北京建城的伝説』（東大圖書公司、一九九六年）である。

ところが近年、この問題については、于希賢『周易』象数与元大都規画布局』（『故宫博物院院刊』一九九九年一）が『周易』に基づき説明を加えている。すなわち、『周易』に対する造詣が深かつた劉秉忠が、大都プランを描く際にその思想を反映させたとする。『周易』によれば、天地の中和の数が十一になるため、門の数が十一になったと述べる。しかしまた一方、金文京『書評 陳學霖『劉伯温与哪咤城——北京建城的伝説』』（『東洋史研究』五八—

一、一九九九年）は、呪術的もしくは風水の意味との関連を指摘している。このように、城門の数に關しては、那咤太子伝説に加えて、新たに『周易』や風水の影響が及んでいたとする見解も提示され、いまだ決着していないのが現状といえる。

こうした城門の問題のみならず、愛宕論文は次代の研究に影響を及ぼしている。大都城外の繁栄については、渡辺健哉『元代の大都南城について』（『集刊東洋学』八二、一九九九年）に示唆を与え、また二都を包括した空間を「首都圈」と捉えた杉山正明の一連の著書にも影響を与えていると考えられる。

2 陳高華『元大都』（北京出版社、一九八二年。のち佐竹靖彦により『元の大都——マルコポーロ時代の北京』中公新書、一九八四年、として訳出）

一九七六年十月に所謂「四人組」が逮捕され、文化大革命が實質的に終焉を迎え、中国で新たな研究の胎動が見られた一九八〇年代前半に至り、大都研究の集大成ともいえる陳高華『元大都』が発表された。以下で簡単に内容を紹介していく。

第一章「大都建成以前の北京」では、殷代の薊城から説き起こし、軀機としての遼の副都燕京、金の中都を説明する。第二章「大都城的建造過程」では、大都建設の理由として、金の中都を改造するには、戦災の被害が甚大であつたことと、用水問題を挙げている。また、大都建設の中心人物は劉秉忠と指摘する。第三章「大都の布局」では、十一門の理由を那咤太子伝説に求め、整然とした都市プランを強調する。第四章「大都的政治生活」では、大都の管理機構と、大都における政治事件について論じる。第五章「大都の経済生活」では、大都における農業、手工業の生産力は低かつたもの

の、それが商人の活動によって補われたとする。第六章「大都的文明生活」では中国の伝統宗教のみならず、イスラム教等の建築物が大都に存在したことを述べ、併せて芸術・文学・科学について紹介する。第七章「元末農民戦争中の大都」は元朝の崩壊から朱元璋の登場までを概観する。

各章題からも察せられるように、その検討は広範囲に及ぶ。これまで見落とされてきた文集は勿論、同じくほとんど利用されることのなかった、各種の詩文を引用しながら大都の社会的状況について全面的に詳述していく。この書の出現によって大都研究は新たな段階を迎え、以後はより精緻な分析が求められるようになった。『元大都』発表後も陳高華は大都に関する社会史的アプローチからの論考を発表して、大都研究を深化している。

3 杉山正明「クビライと大都——モンゴル型『首都圏』と世界帝都」(梅原郁[編]『中国近世の都市と文化』京都大学人文科学研究所、一九八四年。のち副題を付し、増補して『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、二〇〇四年、所収)

『元大都』発表をうけて、大都についての見解を提示したものが、現在の日本でモンゴル時代史研究をリードしている、杉山正明による「クビライと大都」である。この論文では以下に紹介するように、その時点までの問題点が簡潔にまとめられている。

まず、なぜ燕京地区(のちの大都)に都が置かれたかという問題には、(一)この地がすでに非漢族政権の中心都市であったこと、(二)モンゴル自体がすでにこの地をクビライ以前に統治していたということ、(三)モンゴリアを含めて中国全体を考えた場合、燕京地区はその中心に位置するというこれら従来説に加えて、(四)

クビライ政権を生み出す母胎となった軍団がのちの上都地区と燕京地区を根拠としていたからとする。

ついで、大都皇城がなぜ南に偏在しているかという問題には、初期のクビライの冬営地である瓊華島を私的な空間として最優先に囲い込んだ結果、皇城が設定され、その後『周礼』プランにもとづいて市街区プランが定められたとする。最後に何のために大都が築かれたかという問題には、『集史』に「クビライはおのれの名声のために、その(中都)そばにもうひとつの町を立てた。その名はダイドウである」とあるその理由を採用し、さらに当時のクビライが即位する際、アリク・ブガと政権を争ったという即位にまつわる不分明さを払拭するためという政治状況から考えて、『至元四年正月、新年の朝儀に参集した一族諸王の面前で新首都建設を発表するのは客観状況としてよく筋が通る』と述べる。そしてこの大都は、モンゴル人が住むための都市ではなく、帝国の偉容を示すための都市であったとする。懸案となっていた都市プランの問題につき、村田治郎の示唆を得たとしつつ、大都の中心である皇城部分にモンゴルの要素の存在を見出した点はこれまでになかった点として注目される。この部分については、前掲の福田美穂による研究によってあとづけられていった。

愛宕松男・陳高華・杉山正明の諸研究により、大都研究はようやく平面プランの問題から脱却し、歴史学的考察の端緒についたといえるであろう。陳と杉山の両者に共通するのは、その立脚点が漢民族側からかモンゴル民族側からかの違いはあるものの、大都を計画的な都市と見なす点である。中でも、杉山はこのの数々の著作で自説のさらなる展開を図っていく。杉山の主張では、大都が完璧な

計画都市であること、元朝による国家建設事業の中でも大都の建設が最大の眼目であったことを強調する点が注目される。例えば『クビライの挑戦——モンゴル海上帝国への道』（朝日選書、一九九五年）では、大都はまったくの「さら地」からペーパープランを大地にひきうつした、純然たる計画都市であつたとし、形の上では純然たる中国の国都であるが、そこにモンゴル型の都城を組み入れたとする。そして、城内の积水潭が通惠河を経て、海に通じていることに着目し、大都がユーラシア世界全体の中心として設定されたという壮大な構想を描いていくのである。

しかし、これらの研究で大都研究が完結するわけでは、当然ありえない。最後にこれまでの大都研究において欠落している点と問題点を指摘しながら、今後進むべき方向を模索していく。

四 問題点とこれからの研究に向けて

率直に言つて、これまでの研究における問題点は、歴史的推移の中に大都を位置づける視点の欠落である。すなわち、何時の時点で建てられた建物かの検討を経ずして、地図を描くという作業がなされている点に最大の問題がある。これは大都研究を行う際の史料の編纂年代に注意が払われていなかったことに起因する。

これまでの大都研究は基本史料たる『元史』を除けば、主として三つの史料に依つてきた。すなわち『南村輟耕錄』巻二一の「宮闕制度」、「故宮遺錄」及び『析津志』である。ところが、これらの史料のほとんどが、元後半期から末期にかけての編纂であるため（9）、これらの史料に依拠した著述をすれば、いきおい元後半の大都の像しか描きえない。それゆえに、たとえこれらの史料で「点」

を確認することができたとしても、大都がどのような展開を遂げていったのかを「線」として追跡することはできないのである。数ある先行研究も、時間軸を意識して歴史的流れの中で大都がどのように発展していくか、ということを意識した発想がこれまでにはなかった。したがってこれからは、史料の編纂年代に注意を払い、一つ一つの建築物の建設年代を確認しながら、大都の復元研究に取り組む必要がある。

こうした考察を踏まえ、前後の時代を広げた視点も必要である。つまり、近年特に注意されつつある、金の中から元の大都へ、もしくは元の大都から明・清の北京城への連続面である。

連続面については、都城全体はもとより、個々の建築物がどのようにして、継承されていったのかを具体的に考察することも重要であると考えられる。これについては近年いくつかの研究が発表されてきた。李燮平・常欣「元明宮城周長比較」（『故宮博物院院刊』二〇〇〇—一五）は、これまで元の宮城が明の宮城に継承されていたと無批判に受容されていた説に再検討を加え、それが若干南に移動していることを、文献の計測によつて明らかにした。一方日本でも、新宮学「明初の燕王府をめぐる諸問題」（『東洋史研究』六〇—一二、二〇〇一年。のち『北京遷都の研究——近世中国の首都移転』汲古書院、二〇〇四年、所収）が、明の燕王府は、従来述べられていた皇太子宮の隆福宮ではなく、宮城に置かれていたことを論証する。このような手法を参考にしつつ、元の大都の建物が、明代になつてどのように継承されていき、また継承されなかったのかの基礎的考察が今後は求められていくであろう。

最後に、建築学や考古学等の他分野との交流を深めていくこと

は、今後の研究の進展に際して重要なポイントの一つと考えられる。近年再び建築学の見地から、大都ひいては北京を研究する指向が現れてきている。傅熹年「元大都大内宮殿の復元研究」(『考古学報』一九九三—、のち『傅熹年建築史論文集』文物出版社、一九九八年、所収)は数値データによって宮城の建物の図面を復元した研究である。また、考古学的研究についても、レンガの生成時期を手掛かりに建物の建設年代を推定していく手法を導入し、『モンゴル帝国史の考古学的研究』(同成社、二〇〇二年)として結実した、白石典之の研究は大いに注目されよう。

以上自身の関心にひきつけるあまり、はなはだ粗雑なものとなつてしまつたが、大都に関する研究動向と課題について述べてきた。国都である大都の性格を明らかにすることが、つまり元朝のそれに繋がっていくのは疑いない。今後の元朝史研究の進展のためにも、大都についての議論が活発になることを期待したい。

注

- (1) 新宮学「二六年の準備をへて刊行された十巻本北京通史」(『東方』一八六、一九九六年)。
- (2) 村田治郎『法隆寺建築様式論攷』(中央公論美術出版、一九八六年)の川上貢執筆による「あとがき」による。
- (3) 駒井和愛『琅玕』(同博士記念会、一九七七年)の「年譜」、及び山根徳太郎『花を求むる心』(同先生顕彰会、一九九七年)の「略年譜」を参照。なお、村田と駒井の経歴や研究内容については徐蘇斌『日本对中国城市与建築的研究』(中国水利水电出版社、一九九九年)も参照した。

- (4) 關鐸は、中国营造学社の文獻部主任で、日本留学の経験から日本人研究者との交流に積極的であつたという。中国营造学社の沿革は、徐蘇斌『東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナルリズム——関野貞と中国建築史研究』(『日本研究 国際日本文化研究センター紀要』二六、二〇〇二年)、及び崔勇『中国营造学社研究』(東南大学出版社、二〇〇四年)を参照。

- (5) 「璞子」が王壁文の字であることは、前註崔勇『中国营造学社研究』一六八頁によつて知りえた。

- (6) この論文は、徐萃芳の後記によれば、趙正之は一九六二年に亡くなつていて、その遺稿を一九六六年になつて徐萃芳がまとめたという。

- (7) 妹尾達彦『環境の歴史学』(『アジア遊学』二〇、二〇〇〇年)の著述を参照。

- (8) 愛宕松男にも中国での滞在経験がある。自らの回顧によれば、昭和十四年八月下旬から二ヶ月間に渡つて華北地方を調査した体験をきっかけとして、遊牧社会経済の研究から征服王朝の制度史に研究方向を転換したことを述べている。愛宕松男「チャハル草原瞥見記」(『松田寿男著作集 一』六興出版、一九八六年所収の月報)を参照。

- (9) 大都に関わる史料の性格については、王燦熾『燕都古蹟考』(京華出版社、一九九五年)を参照。